

学術情報資源の収集と組織化

大 城 善 盛

1. はじめに

近年、学術情報資源の膨大化と多様化により、それら資源を扱う機関、特に大学図書館等は大きな課題に直面している。資源の多様性を考慮し、従来の大学図書館という名称を変更して学術情報センターとしているところもある。

しかし、名称を変更するだけでなく、扱う情報資源を的確に把握し、それらの収集計画を長期的視野の下に綿密に立て、なおかつ、科学的な組織化を計らなければ、その負わされている機能を果たすことはできない。以下に、学術情報資源の収集と組織化について考察を試みる。

2. 学術情報流通システムの中の図書館

学術情報流通システムにおける図書館の役割は、仲介者のそれである。すなわち、図書館は利用者の要求する、もしくは、要求するであろう情報（もしくは情報資源）を探索・収集し、処理・蓄積し、検索・提供する役割を負わされている。専門図書館のように、情報資源を単に収集し提供するだけでなく、収集した情報資源（もしくは情報）の中から価値ある情報（もしくは、利用者の求める情報）を分析・評価または総合化して提供する図書館もある。

しかし、現代のような高度情報化社会においては、図書館と似たような機能を果たす類似機関もいくつか出現しており、特にニューメディアの登場によって他の情報機関との区別が難しくなっている。学術情報流通システムの中に図書館を位置付けると、1部の例外はあるにせよ、一般的には次のような機能をもっていることが分かる。

- a) 1次情報資源の探索・収集（例：図書、逐次刊行物、非公刊資料、電子データ等）
- b) 2次情報資源の探索・収集（例：印刷メディア系の書誌類、辞典・事典、ハンドブック等、電子メディア系の2次文献データベース、辞典・事典、ハンドブック等）
- c) 上記a) b) で収集された1次情報資源、2次情報資源の処理・蓄積（組織化と保存）
- d) 上記a) b) で収集された1次情報資源、2次情報資源もしくは情報の提供
- e) 所蔵目録等の2次情報資源の作成

機能的には上記のように把握できるが、しかし、他の類似の情報サービス機関と比較した場合の図書館の大きな特徴は、相対的に1次情報資源を豊富に収集し、蓄積・保存していることである。特に、学術情報の観点からは、洪水のごとく生産される玉石混淆の情報資源の中から研究に必要と思われる情報資源を的確に選別し、自館の利用者の需要度が高いと予測される情報資源を収集することが要求される。また、通常の流れルートを通じては入手できない学術情報資源（俗に灰色文献と呼ばれている）も多く存在し、図書館はそれら資源の存在も探索・把握し、入手の方法を調査し、収集に努めなければならない。

図書館が収集すべき情報資源を（作成すべき情報資源も含めて）学術情報の観点から分類すると、図のようになる。その分類法は必ずしも科学的

になっているとは言えない。例えば、非公刊の非印刷系の情報資源として学位論文や文書をリストしているが、それらの情報資源はマイクロ化、デジタル化されることも有り得る。しかし、図書館が扱う情報資源を通称になっている名称に基づいて図のように分類することは、実用的に意義のあることと思われる。そして、それぞれの情報資源の特徴を把握して、探索・収集、組織化、提供することが、学術情報流通システムの中で図書館の役割を果たす際に極めて重要となる。

3. 学術情報資源の収集

顕在化した利用者の情報要求と将来予測される情報ニーズに対して情報資源を確保するために、情報資源の設計、すなわち、収集計画が必要となる。現代のような情報メディアの高度な発展と情報要求の多様化は資源共有の発想を必要とし、共同収集、共同利用、共同保存等を考慮した情報資源設計が要求される。

学術情報資源を設計する際、図書館の目的及び機能、サービス対象の同定、収集する情報資源の範囲等を最初に明確化しておく必要がある。情報資源設計の中には、資源の収集、組織化、評価、廃棄及び更新等のアスペクトが含まれる。この節では、資源の収集計画、評価、更新について考察する。

3.1 コレクション構築方針

情報資源の収集計画は、コレクション（情報資源の総体）構築方針の成文化という形で具体化される。コレクション構築方針を作成する際、3つのプロセスが必要である。第1のプロセスは、現在まで構築されてきたコレクションの評価である。それはコレクションの深さ（DENSITY）と呼

ばれ、コレクション全体の規模、強い主題領域、弱い主題領域等の同定がなされる。第2のプロセスは、現在行っている収集活動の評価である。それはコレクションの強さ (INTENSITY) と呼ばれる。第3のプロセスは、将来コレクションを構築していくための実際の指針の作成で、コレクション方針 (POLICY) と呼ばれる⁽¹⁾。

成文化されるコレクション構築方針は、理想的には一般方針とコレクション・レベルの2部構成となり、それぞれには次のような事項が含まれる⁽²⁾。

<一般方針>

- a) 図書館の目的及び機能
- b) コレクション構築方針の意義
- c) サービス対象の同定
- d) コレクションの範囲
- e) 相互協力

<コレクション・レベル>

- a) コレクションの深さ (DENSITY)
- b) コレクションの強さ (INTENSITY)
- c) コレクション方針 (POLICY)

<一般方針> に関して説明を付すと、<コレクション構築方針の意義> では、現在の予算の枠に制約されない将来を視野に入れた構築方針であり、予算が許せば構築可能となるような大枠のガイドラインであることが強調される。それは、換言すれば、収集の優先順位の決定を必然たらしめ、予算に変更が生じたり、利用者の要求する情報の種類や性格に変化が

起こった場合には、方針は見直される必要があることが示唆される。

<コレクションの範囲>では、カバーすべき全体的な主題領域、情報資源の形態、発生（刊行）国や発生年、言語について言及される。<相互協力>では、殆どの図書館が他機関に依存することなしには利用者の要求をみたすことはできない状況にあるので、どの領域で如何なる形で相互協力体制が組まれるかが記述される。

<コレクション・レベル>においては、主題領域ごとにコレクションの深さ及び強さが評価されて記述され、方針が打ち立てられる。その際、レベルの概念化が必要になるが、アメリカ図書館協会（AMERICAN LIBRARY ASSOCIATION, ALA）は次のようなレベルを例示している⁽³⁾。

- A：包括的レベル
- B：研究レベル
- C：学習レベル
- D：基本レベル
- E：最低レベル

その ALA ガイドラインによると、<包括的レベル>の内容は、「前もって決められた主題分野に関して、すべての重要な記録物を収集しようと努力する性格のコレクションで、このレベルの収集活動は<特別コレクション>を目指すものであり、そして、実現可能か否かは別として、網羅性を目標とする」となっている⁽⁴⁾。<研究レベル>の内容は、「博士論文のための研究や独立の研究に必要な、刊行された主要な1次資料を含むコレクションである。その中には、研究レポート、新しい知見、科学実験の結果、その他研究者に有益な情報を含む資源が含まれる。そしてまた、重要な参考資料のすべて、広域にまたがる専門書と逐次刊行物、関連分野の主

要な索引誌や抄録誌（オンライン・サービスも含めて）もその中に含まれる」となっている⁶⁾。

スタンフォード大学，シカゴ大学，エール大学等の大規模図書館で構成されている研究図書館グループ（RESEARCH LIBRARIES GROUP, RLG）は，情報資源の共用を計る目的でコンスペクタス（CONSPECTUS）というレベル概念を創成して，メンバー館にそれを使っての蔵書の評価を促している。その概念は，基本的にはALAのレベル概念を数字で表わしたものである。異なるところは，ALAの5段階に対して，もう1段下のレベル「収集しない」を追加して6段階になっていることである。RLGのコンスペクタスは，メンバー以外の図書館やカナダ，ヨーロッパの研究図書館でも採用されるようになって，個々の図書館のコレクション構築方針の樹立に役立っているのみならず，世界的レベルでの情報資源の所在情報の共有化に貢献している⁶⁾。

<コレクション構築方針>とよく混同されるものに<選書方針>というのがある。コレクション構築方針が図書館内部の人々だけでなく，外部の関連者へのコミュニケーション手段として，特に予算折衝等において極めて重要な役割を果たすのに対し，<選書方針>は内部向けの業務マニュアルとも呼ぶべき性格のものである。選書方針には，コレクション構築方針を具体的に実施に移す方法，選書のための組織作り，選書基準等が盛り込まれる。（資料1-3はコレクション構築方針の具体例である）。

3.2 コレクションの評価

情報資源がコレクション構築方針に沿って収集されると，ある期間を経た後，収集される目的（収集面における図書館の目的）を果たしているかどうかを評価する必要がある。測定・評価の結果，新しいコレクション構築方針が打ち立てられる。すなわち，<コレクションの評価>は図書館運

営計画の1部であり、単発的に行なわれる性質のものでなく、定期的に計画的に行なわれるべき極めて重要な図書館業務である。

コレクションの評価を行う際、次の点に留意する必要がある⁹⁾。

- a) 評価は明確に規定されたコレクション構築方針に基づいて行うこと
- b) 評価の目的を明確にすること
- c) 評価の実施に必要な時間や資源を確実に把握しておくこと

b)とc)は、コレクションの評価だけでなく、他の評価に関しても言えることであるが、a)は構築方針なしでコレクションを評価することは不可能であることを示唆している。コレクション構築方針は、評価のために測定したデータを比較する拠所となる。しかし、わが国にはコレクション構築方針を作成している図書館は少ない。

<評価の目的を明確にすること>に関しては、それは換言すれば、目的を測定可能な用語で表現するということである。測定可能な形で目的を明確にしたならば、次は測定の方法や手段を検討して実際の測定に入る。コレクションの測定法として、a)統計法、b)観察法、c)標準的な書誌との照合、d)利用調査等がある。その中で、最も客観性に富む測定法は、<利用調査>であり、主題分野によって多少の差異はあるものの、過去の利用実績から未来の利用可能性が予測できると言われている¹⁰⁾。しかし、利用調査には潜在的利用者は含まれていないので、利用者調査によってそれを補う必要がある。また、コレクション・レベルで<包括的レベル>を目指している図書館は、利用の有無に拘らず網羅性を目標としており、その場合には、<標準的な書誌との照合>等の調査法が適している。

3.3 コレクションの更新

情報資源が利用を目的として収集されるならば、更新計画が必須となる。収集される情報資源の中には、収集時には最新の情報を含んでいたけれども、後に改訂版が刊行されたり類似の情報資源が発生したりして、利用価値が半減するものもでてくる。また、ある情報資源の中には、過去には利用価値があったけれども、内容的に一過性のものであったり、もしくは利用者に変更が生じたりして、将来的なメリットを失うものもでてくる。さらに、何らかの手違いで収集され、最初から図書館の目的に合致しない情報資源もあるであろう。そのような情報資源に対処する図書館計画が必要であり、それは、＜間引き (WEEDING)＞と呼ばれ、収集計画と同じくらい重要な図書館業務である。

コレクションは生きた有機体と言われ、増大する側面のみが強調される傾向にあるが、図書館の目的の遂行(すなわち、利用)の観点からは、＜増大＞だけでなく＜間引き (WEEDING)＞が伴ってはじめて生きた有機体と言える。特に、スペースに限りがある専門図書館等で、間引き (WEEDING) は収集に劣らないくらい重要な業務となる。間引き (WEEDING) はまた、異なる側面からみると、保存に値する情報資源を明確化することでもある。

間引き (WEEDING) には、次のような種類がある⁴⁾。

- 1) 降格 (RELEGATION) : 利用頻度の高い書架から低い書架への移動
- 2) 倉庫移管 (STORAGE) : 倉庫への移管であるが、往々にして職員が配置されていない
- 3) 寄託 (DEPOSIT) : コレクションの1部を他の機関や図書館に寄

託すること（所有権は寄託した図書館が有する）

4) 廃棄 (WITHDRAWAL) : コレクションから抹消すること

4. 情報資源の組織化

コレクション構築計画に沿って、個々の情報資源が購入されて、もしくは寄贈・交換等によって図書館に入ってくる。そして、それら情報資源の効率的利用を計るべく組織化が行なわれる。情報資源の組織化は、1次情報資源と2次情報資源の組織化に大別して考えることができる。

4.1 1次情報資源の組織化

学術的な1次情報資源として、図書、逐次刊行物、テクニカル・レポート等の伝統的な情報資源からオンライン・データベース、CD-ROM データベース等のニューメディア型まで種々さまざまな形態が存在する。それら1次情報資源の組織化においては、次のような要因の影響を受ける。

- a) 館種（公共図書館、大学図書館、専門図書館等）
- b) コレクションの構成（図書、逐次刊行物、非印刷資料、ニューメディア等）
- c) 施設や設備環境（保存図書館、中央館と分館、搬送手段、機械化等）

<館種>が大きく影響する組織法に閉架式と開架式がある。昔と異なり現代では閉架式は公共図書館や専門図書館においては希であり、大学図書館で最も多く見られる。大学図書館は歴史的に研究者志向の組織化を行い、学生へのサービスを疎かにしてきた。その名残りが閉架式である。

アメリカでは、現代の大学図書館は研究、教育の両方とも等しく支援す

る機能を負わされているという認識の下に、殆どの大学図書館が閉架制を止めて全面開架制に切り換えている（全面開架といっても、貴重資料や特別の情報資源は除かれるけれども）。日本図書館協会の調査によると、わが国でも現在では筑波大学や宮崎大学をはじめ、100以上の大学図書館が全面開架制を将用し、全面開架に近い大学図書館も100近く数えるに至っている⁴⁰。

〈コレクションの構成〉とは情報資源の種類を意味し、組織化に最も大きな影響を与えるファクターである。というのは、現代の図書館はあらゆる種類の情報資源を収集することを期待されており、極端な言い方をすれば、未出現の情報資源まで収集することが期待されているのである。情報資源の種類によって組織化される典型的な例として、視聴覚ライブラリー、マイクロ資料室、マップ・ルーム（地図室）、データ・ライブラリー（コンピュータ・ファイル）等がある。

コレクションの主流を占めるモノグラフ（図書）については、ある特定の分類体系に基づいて主題別に配架されているのが現状である。将来、資源の目次を含むようなオンライン目録が出現するようになると、書架スペースの有効利用という観点から、受入順配架に切り換える図書館が出てくる可能性もある。

逐次刊行物については、学術情報資源として重要な要素を占めるが、その組織化は難しい。一般コレクションと同様に逐次刊行物も主題別配架をすべきかどうかについては調査研究の余地がある。例えば、大学図書館における逐次刊行物の年間増加量は相当高く、その主題配置は書架スペースの効率的利用という観点から難点をもっている。また、少数の専門誌を除けば、逐次刊行物のカバーする主題範囲は相対的に広く、一般的情報資源と混配するメリットについても疑問の余地がある。

〈施設や設備環境〉が影響する組織法として、保存図書館の存在を挙げ

ることができる。保存図書館は、本来の図書館が施設の的に収容不可能となつて、あまり利用のない情報資源を移管して保管するために建てられる。情報資源は利用されるために収集されることを考慮すると、保存図書館に資源を組織化する場合、たとえそれら資源の利用頻度が低くても、アクセスのメカニズムを十分配慮する必要がある。その点、保存される情報資源への効果的なオンライン・アクセスと搬送システムを伴っているワシントン研究図書館コンソーシアム(WASHINGTON RESEARCH LIBRARY CONSORTIUM)の保存図書館構想は理想的なモデルと言えるであろう⁴⁰。

情報資源の組織法に影響を与える施設の要因のもう一つの例として、中央館と分館(資料室)がある。分館(資料室)の設置に関しては、情報資源が主要因となっている場合と施設の要因の場合とがある。例えば、わが国の大学図書館における専門書は分館もしくは資料室、学習書は中央図書館という発想、アメリカにおける大学院図書館と学習(学部)図書館という構想は情報資源が主要因である。

いずれにせよ、複数の図書館が存在する場合、システムとしての図書館の目的に合致した情報資源の組織化が要求される。特に、大学の研究室等に保管される情報資源に関しては、その有効利用を計るべく所在情報を完備して、直接の関係者以外の研究者にもアクセス可能とし、利用の要求が出た際にはいさぎよく利用させるようなシステム作りが肝要である。不幸にして、わが国の場合、大学や研究室の閉鎖性ゆえに、研究室等に組織化されている学術情報資源は有効に利用されていない。

4.2 2次情報資源の組織化

2次情報資源の組織化は、1次情報資源の組織化とはやや異なったアプローチが要求される。それは、2次情報資源としてのニューメディアの出

現と目録という自館作成の2次情報資源に起因する。購入される（または、寄贈・交換等により入手される）2次情報資源は、コレクション構築計画によって相当程度決まってくるが、従来型の2次情報資源の急増に加えてオンライン文献データベースやCD-ROMデータベース等の新しい形態の2次情報資源の出現を見、学術情報資源を主に扱う図書館はそれら資源の収集及び組織化において大きな課題に直面している。

それらの図書館では、印刷形態の2次情報資源、たとえば、索引誌や抄録誌等を広く収集し所蔵している。検索効率の高いニューメディア（データベース）の出現により、図書館は予算的に従来型の資源の収集をある程度打ち切る必要に迫られている。しかし、それら従来型のメリットを挙げて反対する研究者がいて図書館は難しい立場に立たされている。エンドユーザーは研究者であり図書館は弱い立場にあるけれども、主体的・客観的に判断を下して限られた予算を有効に執行すべきである。

2次情報資源は1次情報資源を検索したり、事項的（事實的）情報を調べたりするためのツールである。それ故、1次情報資源とは異なった特別の場所に配架した方が利用しやすい。一般的に、その場所はレファレンス・ルーム（参考図書室）と呼ばれている。レファレンス・ルームはスペースに限りがあり、そこに如何に効率良く且つ効果的に情報資源を組織化するかということは、極めて難しい課題である。書誌や辞典等の2次情報資源は通常目録を介さず、書架へ直接行って利用する。効果的な組織法とはそのようなことを可能にする配架法である。わが国の大学図書館では、図書館建築の内部設計も影響していると思われるが、担当責任者の認識不足もあって、上記のような効果的な組織化を行っているところは少ない。

オンラインやCD-ROMによる2次文献データベースが普及するにつれ、自館の目録を如何に作成し、維持していくかという課題が生ずる。コンピュータ目録化することを決めた場合、MARCや2次文献データベー

スとの関係を調整・整理する必要に迫られる。しかし、その件に関しては別の機会に譲り、ここではオンライン目録を維持している図書館が抱えている課題について触れると、OPAC化を予期して建てられた図書館は少なく、多くの図書館で目録端末を置く場所に困っている。スペースの関係（限界）で端末台数を増やすことをためらっている図書館もある。目録も2次情報資源の1部であることを考慮すると、レファレンス・ルームに近い所が理想的であり、少なくとも凍結したカード目録を維持している図書館では、カード目録に隣接している必要がある。

4.3 資源の組織化と情報分析

利用という観点から情報資源の効率的組織化を考える場合、2つの条件が前提となる。1つは、利用者の求めている（もしくは、求めるであろう）情報の把握、すなわち、情報要求の把握である。2つめは、情報資源はどのような内容（情報）を含んでいるかの把握、すなわち、情報資源の把握である。図書館が情報流通システムにおいて仲介者の役目を果たそうとするならば、それら2つの側面の情報分析が必要である。しかし、ここでは、利用者の情報要求の分析は割愛し、情報資源の内容分析に焦点を当てて考察することにする。

図書館では、構築されているもしくは構築されるであろうコレクション全体及び各領域の情報分析を行い、情報資源自体の組織法とそれら資源へのアクセス・システムを策定する。情報分析は主題分析が主となるが、必ずしもそれだけではない。例えば、1次情報資源、2次情報資源という仕分けは、情報のオリジナリティを基準にした分析である。

情報分析の結果を踏まえてなされる情報資源の組織法に関しては、多くの図書館が既存の分類システムを採用している。既存の分類システムには3つの系統がある。第1の系統は主題と情報資源の形態的要素の両方を重

視した分類法である。典型的な例は、DDC（デューイ十進分類法）とNDC（日本十進分類法）である。それらは十進展開という制約があるけれども、相対的に知識体系的であり、アクセス・ツールである分類目録への適用も視野に入れたものである。しかし、コレクションの量が增大すると分類記号が情報資源の背に収まらなくなり、研究図書館における有効性について疑問が生じてくる。[例えば、1960年代にアメリカの大学図書館でDDCに限界を認識してLCC（アメリカ議会図書館分類表）に変更したところが多かった。わが国でも最近、京都大学附属図書館がNDCからNDLC（国立国会図書館分類表）に変更している。

第2の系統は、知識の体系化よりも情報資源の量とバラツキを重視した分類法である。それがLCCとNDLCである。LCCは1館の分類法であったが、多くの大学図書館で採用されるようになり、標準的な分類法に昇格している。NDLCは、NDCに限界を感じたNDLがLCCを参考にして作成したアルファベットを主標とする分類法である。NDLCはNDL以外にもいくつかの図書館で採用されているが、未だ標準的な分類法にはなっていない。

第3の系統は、情報資源の形態的要素を殆ど無視し、知識（概念）の分析合成を基盤とした分類法である。典型的な例として、UDC（国際十進分類法）、CC（コロン分類法）、BC（書誌分類法）がある。それらは、書誌分類のための分類法であるため、一般的には情報資源の組織化（書架分類）には適さない。しかし、専門的図書館協会の調査によると、科学技術分野を主とする専門図書館ではUDCを情報資源の組織化に採用しているところもある⁴⁰。

図書館では情報資源へのアクセスを可能とするため、資源の主題別配架と共に、目録もしくは代用物（SURROGATE）と呼ばれる書誌ツールを作成する。目録を財産リストの発展形としてでなく、情報資源の代用物

として把握することは、学術情報流通の観点から極めて重要である。目録が代用物としての役目を果たすためには、利用者が必要とするであろう情報資源の属性(書誌要素)を記録しておく必要がある。そして、学術情報に対しては、著者的アプローチも重要であるが、主題的アプローチが主流であることを考慮すると、主題アクセス・ツールとしての目録の機能が重要となる。

このように、目録と言えば記述法がとかく重視されがちであるが、情報分析(特に主題分析)とも深い関わりがある。目録の記入単位については、最近、書誌階層の概念が導入されて単行単位、構成単位等の概念が一般化しつつあるが、研究図書館で記入単位をどのレベルに据えるか、そして、どのレベルまで掘り下げる必要があるかということは、その図書館のコレクション全体の情報分析と利用者の情報要求の分析なしには決められない。もちろんその際には、他機関の目録や MARC データベースをはじめ、一般書誌類も考慮に入れる必要がある。

他図書館の目録や書誌類も考慮すべきであるという議論は、次のような根拠に基づいている。すなわち、図書館は利用者の要求する(もしくは、要求するであろう)情報を最優先させて情報資源を収集し組織化するけれども、自館で収集できる資源には限界があり利用者の種々の要求を満たすことはできない。それを補足するためには、外部の情報資源に対する書誌的コントロールをよくし(2次情報資源の充実)、自館にない1次情報(源)は相互協力により他館より入手する。そして、書誌類は情報資源全体へのアクセス・ツールであるのに対し、各館の目録は己れの所蔵する情報資源へのアクセス・ツールであるという認識の仕方である。

記入単位の決定後、情報分析の領域で次に必要なことは、主題アクセス・システムを決定することである。目録における主題アクセス・システムは、現在2種ある。すなわち、分類と件名である。分類システムに関して

例えば、情報資源の組織化（書架分類）のためのシステムと書誌的アクセス（書誌分類）のためのシステムとは基本的に異なる。しかし、わが国では一つの分類システムを両目的に使用している図書館が多い。また、書架分類用のシステムを書誌ツール用に兼用する際には、分出、重出等の副出記入が特に重要となるが、そのような方策を講じている図書館も少ない。

件名システムに関しては、分類目録のような記号でなく言葉（件名）で検索するので、利用者本位（USER-ORIENTED）のシステムとすることができる。しかし、わが国では件名目録を維持している図書館は極めて少ない。通常、件名目録は件名標目表に基づいて作成される。専門図書館等で特定主題を対象に作成される語彙表をシソーラスと称しているが、基本的には件名標目表と変わらない。相違点といえば、件名標目表は一般に知識の全分野をカバーするために、シソーラスと比較して、a) 上位概念、下位概念、関連概念等の概念の体系化が十分でないこと、b) 概念の深化（詳細化）が十分でないことである。

件名標目表が上記のような特徴（欠点）を持っているため、件名目録は科学技術分野の検索システムとしてはあまり評価されていない。（科学技術系の研究者の求める学術情報が論文主体であるのに、図書館目録はモノグラフを記入単位にしていることも付け加える必要があるが）。しかし、件名標目表のもつ欠陥を修正するための努力はなされている。例えば、LCSH（LIBRARY OF CONGRESS SUBJECT HEADINGS、アメリカ議会図書館件名標目表）の最新版は、BT（上位語）、NT（下位語）、RT（関連語）がかなり整理・付加されていて、シソーラスの特徴を帯びてきている¹⁰⁾。

しかしながら、学問分野によって使用するターミノロジーの内容が異なるので、知識全体のシソーラス化には自ずと限界があるように思われる。そしてまた、研究者の主題アクセス・ツールとして十分機能するくらい

に件名標目表の概念（標目）を深化させることにも限界があるように思われる。たとえそのような件名標目表ができ上がったとしても、更新もまた至難の業となるであろう。研究者のための主題アクセスはシソーラスに譲り、件名標目表は一般の人や学生を主ターゲットにする必要があるように思われる。もちろん、モノグラフを主情報源とする人文科学の研究者には、依然として件名目録が主題アクセス・ツールとして十分機能することは論を待たない。

情報分析と関連する他の図書館業務として、特定の主題目録や雑誌記事索引の作成等がある。書誌や索引の作成は、基本的に図書館目録の作成と同じである。作成時に採録に値する情報資源であるかどうかについての厳しい主題分析が行なわれる点が異なる。索引作成は、一般的に主題範囲を決めることから始め、次に採録すべき対象（情報資源）の範囲を内容（質）、形態、言語、発生年等によって決める。それらは、コレクション構築方針と基本的に同じである。そして、最後に実際に作成に入る訳であるが、その手順は分類目録や件名目録の作成手順とあまり変わりはない。

情報分析を必須とするもう一つの重要な図書館業務がある。それは、専門図書館等における調査サービスである。調査サービスは、自館のコレクションに限定せず、広く内外の情報資源を調査し提供するサービスである。それは、2次情報資源を駆使することからスタートし、往々にして集めた1次情報の分析、加工まで行う高度の情報サービスである。しかし、先端をいく1部の専門図書館を除いては、そのような高度な情報サービスは未だ一般化していない。その種のサービスは図書館に課された今後の課題である。

4. 結 び

以上、学術情報資源の収集と組織化について考察を試みた。収集の側面では、成文化されたコレクション構築方針が極めて重要であること、そして、資源の評価及び更新計画も構築方針に劣らず重要であることを指摘した。しかしながら、わが国の状況をみると、成文化されたコレクション構築方針をもっている図書館は少ない。それは、図書館サービスを遂行していく上で大きな支障となっている。成文化された構築方針をもっていない原因を、大学図書館を例に考察すると、選書権、特に研究用の情報資源の選書権が図書館にないことが大きく影響していると思われる。コレクション構築方針等の基本的条件を整備していくことによって司書の専門性も認識され、やがてそれが専門職制につながっていくと思われるので、わが国の図書館はコレクション構築方針の重要性を認識し、その成文化に努めるべきであろう。

学術情報資源の組織化に関しては、情報資源そのものの組織化と資源へのアクセス・ツールの組織化が存在するが、この小論では1次情報資源と2次情報資源にカテゴリー化して考察を試みた。1次情報資源の組織化については、館種、コレクションの構成、施設等が影響することを明かにした。2次情報資源の組織化については、1次情報資源へのアクセス・ツールであることを認識し、利便性を考慮に入れてレファレンス・ルームに効率的に組織化する必要があると論じた。

また、1次情報資源、2次情報資源の両方の組織化において、〈情報サービス〉の観点に立つと情報分析、特に主題分析が極めて重要であると論じ、実際に採用されているいくつかの分類システムについて分析を試みた。しかし現在のところ、一般利用者を念頭におくと、主題目録としては

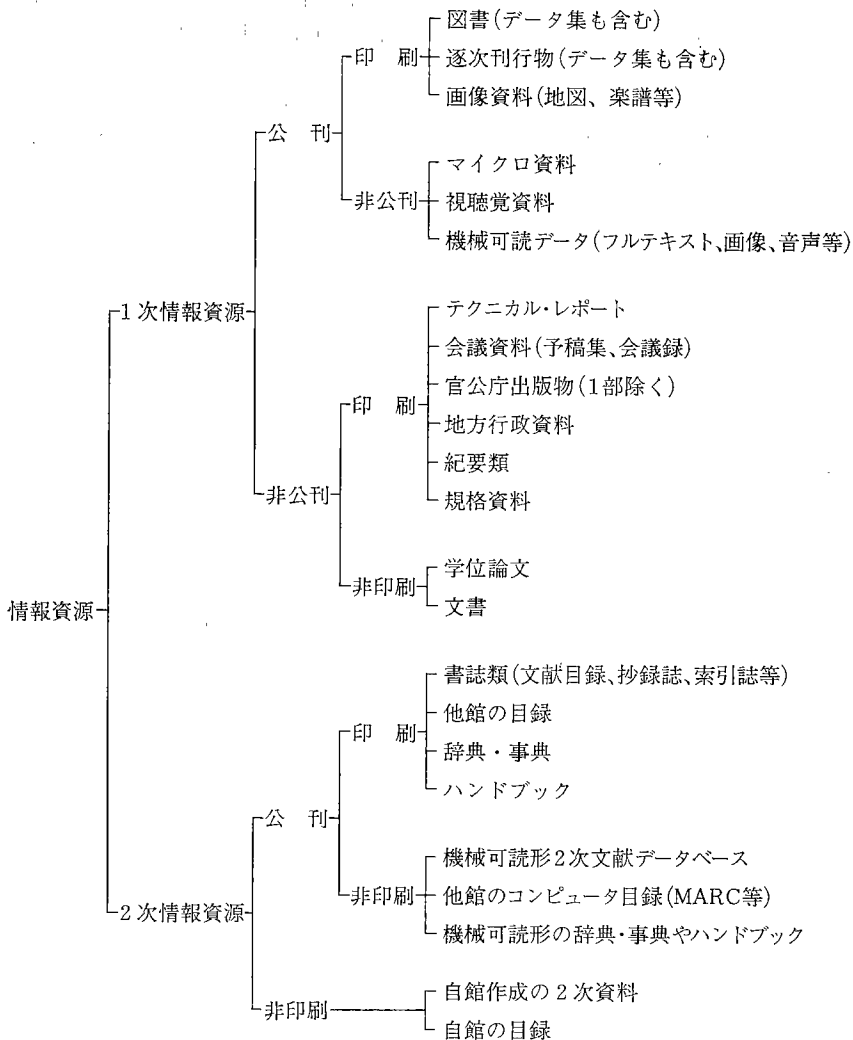
分類システムよりは件名システムの方が優れている。シソーラスと比べていくつかの欠点があるけれども、図書館の件名システムを整備する必要がある。特にわが国では、件名システムを備えている図書館は少ないので、情報資源の組織化の点でも大きな課題を抱えていると言えるであろう。

注

- (1) Gorman, G. E. and Howes, B. R. *Collection Development for Libraries*. London, Bowker-Saur, 1989, p. [27]-36. しかし、深さ (DENSITY) と強さ (INTENSITY) という用語は必ずしも定着している訳ではない。例えば、アリゾナ州立大学図書館では、深さ (DENSITY) の代わりに強さ (INTENSITY) を用い、強さ (INTENSITY) の代わりに活動 (ACTIVITY) なる用語を使用している。参照： *Arizona State University Libraries Collection Development Policy Statement*. Preliminary Ed. (Tempe, Arizona State University Libraries, 1987)
- (2) Ibid.
- (3) ALA. Collection Development Committee. *Guidelines for Collection Development*. Ed. by D. L. Perkins. Chicago, ALA, 1979.
- (4) Ibid.
- (5) Ibid.
- (6) Bloomfield, B. C. "Collection Development : the Key Issues," in : Corral S. ed. *Collection Development : Options for Effective Management* (London, Taylor Graham, 1988, p. 3-27).
RLG IN 1990 (Palo Alto, RLG, 1991).
ABOUT RLG (Palo Alto, RLG, 1989).
 中元誠「アメリカにおける研究図書館の資料分担収集の動向とその展望」『大学図書館研究』35号 (1990. 2), p. 18-23.
- (7) Robbins-Carter, J. and Zweizig, D. L. "Are We There Yet? (Lesson One)," *American Libraries*. vol. 16 (Oct. 1985), p. 624-627.
 Hall, B. H. *Collection Assesment Manual for College and University Libraries*. Phoenix, Oryx, Press, 1985, p. 1-6.
- (8) Gorman, G. E. and Howes, B. R. op. cit., p. [147]-156.
- (9) Ford, G. "A Review of Relegation Practice," in : Corral S. ed. *Collection Development : Options for Effective Management*. op. cit., p. 71-87.

- (10) 『日本の図書館』(1990年版) 日本図書館協会 1990.
- (11) Vassallo, P. 著 大城善盛(他)訳「大学図書館のコンソーシアム-WRLCの事例を中心として」『同志社図書館情報学』(『同志社大学図書館学年報』17号別冊) p. 54-70.
- (12) 『専門情報機関総覧』(1988年版) 専門図書館協議会 1988.
- (13) *Library of Congress Subject Headings*. 12th ed. Washington, D. C., Library of Congress, 1989. 3 v.

情報資源の分類



資料1. アリゾナ州立大学図書館コレクション

構築方針：目次

はじめに	(P. iii)
第1部：記述的方针	
A. 使命	(P. 1)
B. コレクション構築の概念的目標	(P. 1)
C. コレクションの範囲	(P. 4)
D. 収集される（もしくは収集されない）資源の種類	(P. 4)
E. コレクションについての一般方針	(P. 5)
1. 学位論文	(P. 6)
2. 資源の複数化（複本）に関する方針	(P. 7)
3. 言語辞書	(P. 12)
4. ニュースレター	(P. 16)
5. 新聞	(P. 18)
6. 短期貸出方針	(P. 22)
7. ソフトウェア	(P. 25)
F. 特別コレクションに関する方針	(P. 27)
1. アリゾナ・コレクション	(P. 28)
2. チカーノ（メキシコ米国人）研究コレクション	(P. 35)
3. カリキュラム資料	(P. 38)
4. マイクロ形態政府刊行物コレクション	(P. 41)
5. 指定図書の本	(P. 45)
6. 特殊コレクション	(P. 46)
第2部：分類順報告（アメリカ議会図書館分類表による詳細分析）	
説明	(P. 47)
分類順報告	(別P. 1-136)
分類順報告索引	(別P. 1- 30)
第3部：付録	
A. ロケーション（場所）コード	(P. 55)
B. 責任（領域）コード	(P. 56)
C. コレクション・レベル・コード	(P. 58)
D. 言語コード	(P. 60)
E. 学部学科と担当主題専門家のリスト	(P. 62)
F. 主題専門家索引	(P. 69)

G. ブランケット (APPROVAL/BLANKET) 発注計画	(P.72)
索引	(P.74)

典拠: ARIZONA STATE UNIVERSITY LIBRARIES COLLECTION DEVELOPMENT POLICY STATEMENT. PRELIMINARY EDITION (TEMPE, ARIZONA STATE UNIVERSITY LIBRARIES, 1987)

資料2. アリゾナ州立大学図書館コレクション

構築方針: 概念的目標 (第1部B)

I. 総論 (抜粋)

アリゾナ州立大学図書館は、その所蔵するコレクションがアリゾナ市民、そして広く研究者コミュニティの研究ニーズに資することを認識している。図書館が所蔵する特別の資源を必要とするすべての人々に図書館は利用可能である。図書館のサービス範囲は、学内のアカデミック・コミュニティのみでなく、広く地域や学者コミュニティも包含している。しかし、コレクション構築の基本的目標は学内の研究ニーズに応えることである。それ故、アリゾナ州立大学図書館は、近隣に存在する図書館と資源が重複することやそれら図書館の使命を侵すことは避けると同時に、この構築方針に書かれていない主題領域の資源は収集しない。

II. コレクション (抜粋)

アリゾナ州立大学図書館のコレクション構築の目標は、アリゾナ州立大学で現在行なわれている研究、教育及びその他の大学プログラムに関連する記録情報を同定し、それらプログラムの範囲と深さにおいて適切な資源を収集し保存することである。資源の収集を決定する際には、次の原則に従う。

1. コレクションはこの大学で提供されているすべての教育プログラムを支援する
2. コレクションは次にリストする優先順位で、調査・研究を支援する。
 - a. 学位 (大学院) が現在授与されている領域
 - b. 学位は授与されていないが、教育の必須の要素である領域
 - c. 大学の使命を支援すべく独立研究が行なわれている領域
 - d. 出現しつつあるか、又は将来予測される教育もしくは研究領域
3. 選択された特定領域で卓越した研究コレクションを構築する

(III~VI: 省略)

VII. 運営・管理

1. コレクションの構築、管理面でリーダーシップを発揮すること
2. アリゾナ州立大学の卓越したコレクションを構築できるような長期システムを計画し、開発すること

3. 地域の利用者のニーズに応えるべく、又、図書館界の協力体制を支援するため、資源共有の一環として質の高い共同コレクション構築プログラムを開発し、促進すること
4. コレクションの保存と安全のためのコレクション管理法を開発すること

典拠：資料1と同じ

資料3. アリゾナ州立大学図書館コレクション

構築方針：コレクション・レベル（付録C）

（抜粋）

アリゾナ州立大学図書館は、コレクションとコレクション構築方針を説明するために8つのコレクション・レベル・コードを使用している。それらのコードはコレクションの強さ（INTENSITY）と活動（ACTIVITY）の判断基準を表わす。強さとは現コレクションのレベルであり、活動（レベル）とは大学のプログラムを現在及び将来にわたって支援するために望ましい収集活動のレベルを指す。

- 0： 収集範囲外
- 1A：凸凹型の最低レベル（偶発的選書）
- 1B：良く選書された最低レベル
- 2： 基本情報レベル

その領域の主題を説明し概念化するのに役立つ程度の極めて選択的コレクション。種々の情報は他所で入手できることが示される。そのレベルの領域では、辞典・事典、選択された重要資料、歴史的概説書、書誌及びハンドブック等が含まれる。このレベルのコレクションは、その領域における教育や独立学習を支援するには不十分である。

3A：初期学習レベル

学部教育を支援するのに適切なコレクション。現刊行の基本的モノグラフ（具体例は、CHOICEである）から該当する資料が選書される。そして、BOOKS FOR COLLEGE LIBRARIESに掲載されているような質の高い既刊モノグラフによって支援されている。幅広く選書された重要な著者の著作、2次的著者の最重要著作、主要な逐次刊行物、該当分野における最重要なレファレンス・ツールや書誌の最新版が含まれる。

3B：高度学習レベル（教育支援レベル）

学部と殆どの大学院の教育を支援するコレクション。すなわち、研究を

支援するには十分でないが、ある限られた目的に必要な知識を維持するに適切なコレクション。現行の資料や既刊も含めた広い範囲の基本的なモノグラフ、重要な著者の包括的なコレクション、2次の著者の選択的著作、代表的な逐次刊行物、該当分野におけるレファレンス・ツールや基本的な書誌が含まれる。

4： 研究レベル

博士論文や独立研究に必要な刊行された大部分の資料を含むコレクション。研究レポート、新しい知見、科学実験結果、その他研究者に必要な情報（源）が含まれる。又、重要なレファレンス・ツールのすべて、広範囲にわたる専門的モノグラフ、逐次刊行物の大規模コレクション、該当領域の主要な索引、抄録が含まれる。古い資料も歴史的研究のために保存される。外国語で書かれた関連資料も含まれる。

5： 包括的レベル

ある決められた特定領域に限られるけれども、様々な言語で書かれた資料も含めて、記録されたすべての重要資料を収集すべく努力するコレクション。資料は刊行物、手稿、その他の形態を含む。このレベルのコレクションは特殊コレクションと呼ばれ、実現できるかどうかは別として、網羅性を目標としている。

典拠：資料1と同じ